二〇二二年八月二六日

虫の夜の独り寝の杯重ねけり　うつぎ
秋風や筆立てに挿す竹とんぼ　ひのと
すり減りし点字ブロック秋時雨　みきお
蟷螂の大見得きつて固まりぬ　明日香
種無しを舌で合点巨峰食む　あられ
うち返す秋の渚や誰も居らず　こすもす
幼帝の眠る墳丘ちちろ鳴く　明日香
穂芒の生糸のごとく日をはじく　素　秀
体重をかけて切り分く南瓜かな　満　天
長き夜のレコードへ針落としけり　ひのと

二〇二二年八月二五日

海鳴りのほかに音無く星月夜　かえる
忘却と戦ふ母の夜長かな　もとこ
新しき墓加はりて山澄めり　ひのと
余情もて鳴きおほしけり法師蝉　せいじ
転ぶ児の傷のかさぶた夏の果　なつき
闘病も武勇伝とす生身魂　なつき
黄金田となりて湧き立つ匂ひかな　みきお

二〇二二年八月二四日

星月夜ぐらり傾き着陸す　ひのと
蒲の穂のさざ波となる池広し　そうけい
夏逝くや履かずに小さくなりし靴　ひのと
秋の蝶草から草へジプシーす　む　べ
民宿の外厠へと虫すだく　智恵子
蜩や羊歯群落となる山路　豊　実
細筆で描きし如くに今朝の月　明日香

二〇二二年八月二三日

共白髪偕老願ふ夜長かな　たか子
ほ句の秋自由に動く足が欲し　宏　虎
畳目の指に冷たき庵の秋　素　秀
裏路地の微風を捉ふ猫じゃらし　そうけい
針箱に娘の釦小鳥来る　ひのと
海峡の巨船呑み込む秋没日　うつぎ
夏雲と秋雲空に隣りあふ　たか子

二〇二二年八月二二日

朝靄の晴れし牧場鬼やんま　智恵子
蔵に積む新米袋ほの温し　みきお
水うてば土の匂ひも涼新た　かえる
納骨を終へたる背ナに法師蝉　素　秀
受付けに忘れ物なる秋扇　あひる
朝顔の芯に夜明けの色ひそむ　ひのと

二〇二二年八月二一日

みささぎの御前で昼餉野路の秋　明日香
軋みては閉づる門扉や虫の夜　ひのと
二学期の少女が隠すピアスかな　ひのと

二〇二二年八月二〇日

過ぎし日を老いたる姉と秋の盆　たか子
もろこしにかぶりつく子の歯は真白　もとこ
旅人の吾により来る蜻蛉かな　うつぎ
しもつけの花の淡さよ霧の山　あひる
駅の椅子背中合はせや秋暑し　うつぎ
数行の吾子の返信日々草　あひる

毎日句会みのる選・二〇二二年八月二八日